

バウハウス

—デザイン概念の誕生

東京理科大学専門職大学院イノベーション研究科准教授
鈴木 公明

1. バウハウスの誕生

第一次世界大戦での敗北と革命の混乱の中で、1918年ドイツ帝国が崩壊しました。この時期、ベルリンでは芸術のための労働評議会が生まれましたが、その綱領は、既存のアカデミックな教育機関の解体や美術、建築学校の改革を求めるものであり、また、醜悪な建築や記念碑を除去し、画家および彫刻家による構想を含む包括的、ユートピア的な建築計画の作成が必要であるとするものでした。

このような時代背景の中で、革命、共和国の宣言そして崩壊と、激動の歴史の狭間で最も民主的と言われるワイマール憲法の制定により成立したワイマール共和国で、1919年3月に国立バウハウスは設立されました。

初代校長には、それまでにドイツ工作連盟に参加してデザインと工業を振興するための活動を実践していたワルター・グロピウスが就任しました。バウハウスのカリキュラムは、すべての生徒が実際の工房で仕事をする前に基本コースを受講するものでした。ヨハネス・イッテンが担当した初期の基本コースは、人間を身体的、精神的に開放し、想像力を育てるために歌、踊り、瞑想などの宗教的な手法が採用されており、同時に、クレーやカンディンスキーなどの前衛芸術家により、色彩や形状が分析・考察の対象とされ、これらの分野における理論化が進みました。初期のバウハウスでは、資金不足のため実際の工房活動に制約があり、教育・研究の方向が抽象的、観念的な理論化に向かったのです。

その結果、色彩や形状を物から分離して分析する視点が生まれました。従来の工芸や芸術においては、考察すべき対象が具体的な陶器、織物、家具というように、物と色彩、形状とが一体となっていました。色彩や形状を物から分離することにより、抽象的な形状一般、色彩一般、すなわち「デザイン」が明確に意識されるようになりました。これが今日的な意味における「デザイン」概念の誕生だと言ってよいでしょう。

もっとも、物とデザインとを対位する捉え方は我が国の法制度にも見ることができ、1888年に制定された意匠条例においてすでに、意匠の定義が「物品に応用すべき形状、模様、色彩……」とされています。

2. バウハウスの教育システム

建築を最終的な教育目標とする理念の下で、すべての芸術を総合するためのカリキュラムは革新的なものであり、形態教育（基本）とクラフト教育（実技）の2つのコースに分かれていました（総合芸術を探究する建築コースは1927年に遅れて設置）。形態教育ではフォルム・マイスター（形態親方）の下で観察、表現および構成を学び、一方、クラフト教育では、ヴェルク・マイスター（工匠親方）の下で石工、木工、金工、陶芸、ガラス、色彩およびテキスタイルを学ぶこととなっていました。

基本となる形態教育を重視し、芸術を総合化する方針は、芸術家があらゆる芸術に通じるべきとするウィリアム・モリスの考え方を承継するものと言えるでしょう。また、教員をマイスター（親方）と呼ぶのは、中世的アーツ・アンド・クラフツ運動を一つの模範とする考え方によります。

バウハウスのカリキュラムは、基本と実技とを分離し、それぞれにマイスターを置くことで、具象物から抽象的形状や色彩を分離する考え方、すなわち新しいデザインの捉え方を理論と実技の両面から追及したものと評価することができます。

3. バウハウスの方向転換

モリスやアーツ・アンド・クラフツ運動との関連性に見られるように、草創期のバウハウスはロマン主義的、表現主義的な側面を有していました。しかし、芸術と技術の統一をテーマに掲げて1923年に開催された最初のバウハウス展は、機械生産への肯定的な考え方を明確に打ち出しており、クラフト教育が大量生産のための準備であると位置づけられました。グロピウスは、単純な道具と簡単な作業から始めて、より複雑な問題、機械を扱う仕事などをマスターすることで生産の全工程を把握でき、機械生産との調和が図られると考えたのです。

1925年にワイマール国立バウハウスは廃校となりましたが、デッサウで市立バウハウスとして再開しました。グロピウスが設計した新校舎（図1）は、バウハウスの究極の目標である「建築における諸芸術の統合」を象徴しており、機能の分離と統合、材料と構造に基づく視覚化という近代建築の特徴を備えています。

4. デザイン工房の成果

バウハウスは、デッサウ時代にその理想を実現していききました。生産実験工房の主要な機能が、機械工業生産方式に適合したプロトタイプ制作になっていったのです。

例えば家具分野では、標準化され、組み合わせが可能となる家具が志向されました。プロイヤーが考案した金属パ



図1 デッサウ市立バウハウス校舎

出典：Stiftung Bauhaus Dessauウェブサイト <http://www.bauhaus-dessau.de/content/images/65dff9e27c9e5e8531df9f026a9664e1.jpg>

イブを素材とするワシリー・チェア（図2）は、軽量、分解可能、衛生的、耐久性、低価格など、工業化社会で求められる諸属性を備えていました。



図2 ワシリーチェア

出典：Knoll社ウェブサイト

http://www.knoll.com/products/product.jsp?prod_id=65

金属加工分野では、イッテンに替わって基本コースを担当したモホリ・ナギが、鍋や照明などのインダストリアル・デザインのプロトタイプ創造に貢献し、多くの照明器具が産業界において製造、販売されるなどの成果を収めました。

また、織物分野では近代的な織機を用いて新しい材料や織り方が探求され、試作した生地サンプルが産業界の注目を集め、印刷分野ではタイポグラフィやグラフィック・デザイン等が追求されました。

この時期のバウハウスは、基礎教育を個人的創造性の解放の場だけでなく、造形上の実験的体験を具体的なデザイン開発に結び付けるための蓄積の場と位置付けるに至りました。加工による材料の形状、構造または応力の変化、人間の五感や空間把握の感覚が分析され、発見的な手法により新しい建築空間の実現が試みられました。

これらの成果は、バウハウス叢書として出版されましたが、そのレイアウトやタイポグラフィ自体が、エディトリアル・デザインの実践例となりました。

5. バウハウスの思想的発展

1928年に第2代の校長となったハルネス・マイヤーは、グロピウスの考え方をさらに推し進め、建築教育を科学的に体系化し、教育全体を再編し、工房教育の位置づけを見直しました。それは、デザインを芸術の視点から捉えるのではなく、機能、社会との関わりの中で捉えなおす試みでもありました。

1930年には第3代校長ミース・ファン・デル・ローエが就任し、建築重視の方針がますます強くなりましたが、ナチスの弾圧が強くなり、1932年にベルリンに移転した後、バウハウスの歴史は1933年に幕を閉じました。この時期に、多くの教員がアメリカに移住し、シカゴにニュー・バウハウスを設立するなどにより、その後の建築やデザイン教育に大きな影響を与えることになりました。

6. バウハウスの意義

短いながらも、デザイン実験の濃密な歴史を刻んできたバウハウスの思想的・実践的成果は、今日でも輝きを失わず、世界中のデザイナーに影響を与え続けています。

様々な才能を結集させて、機械生産の時代にふさわしい新しいデザインを探求したバウハウスの精神を思い起こし、私たちはITの時代におけるデザインを再度検討する必要があるでしょう。

〈参考文献〉

安部公正監修 (2006) 「世界デザイン史」美術出版社
海野弘 (2002) 「モダン・デザイン全史」美術出版社